

# 孫との関係に着目した 高齢者の主観的幸福感に関する研究

中村 辰哉   浜 翔太郎   後藤 正幸

現在、日本の高齢者数は増加し続けており、超高齢社会を迎えようとしている。高齢者は社会全体の中で大きな割合を占めるようになり、この層の活性化が社会全体にも大きな影響を与えるようになると考えられる。そのため、高齢者の主観的な生活の質を向上させるべく、その評価結果の指標である主観的幸福感を高める必要がある。本研究では、孫との関係や関わり方に満足している高齢者は主観的幸福感が高まるという仮説から出発する。そして、高齢者の孫に対する感情や孫との行動に着目し、孫との関わりと高齢者の主観的幸福感の関連について明らかにし、その結果を定量的に示すことを目的とする。具体的には、高齢者に対するSD法による質問紙調査に基づき、高齢者や孫の属性、孫と共にする行動や、孫への情緒的感情を考慮した分析を行う。孫と高齢者の主観的幸福感との関連について明らかにするために、得られたデータを基本統計量分析、探索的因子分析、共分散構造分析を行い、要因間の構造を明らかにする。

キーワード：高齢者、主観的幸福感、超高齢社会、共分散構造分析

## 1 はじめに

現在、日本の高齢者数は増加し続けており、超高齢社会を迎えようとしている。高齢者は社会全体の中で大きな割合を占めるようになり、この層の活性化が社会全体にも大きな影響を与えるようになると考えられる。すなわち、高齢者が活気のある生活を送ることの重要性は将来に渡って高まり続けることが予想され、高齢者の生活の質を向上させる必要がある。しかし、生活の質とは客観的に評価できる概念ではなく、現在の生活に対して感じる高齢者の主観的な善し悪しである。そこで、その評価結果の指標である主観的幸福感[2],[3]を高める必要性が指摘されている。

主観的幸福感を高める方法としてADL(日常生活動作)を高めることなどがいわれている[1]、そのような研究の中でもソーシャル・サポートが注目されている。ソーシャル・サポートとは、ある人をとりまく重要な他者から得られるさまざまな形の援助が、その人の健康維持・増進に重大な役割を果たすというものである[4]。従来研究では家族・親戚・友人を調査対象とすることで、ソーシャル・サポートと主観的幸福感や抑うつなどの関連性が議論されている[5]~[9]。一方で、祖父母と

孫の関係に言及した研究もなされているが、孫を直接の調査対象としてはおらず、孫と高齢者の関係を詳細に定量分析した研究は行われていない。高齢者にとって「孫はかわいい」、「孫はいきがい」といわれ、高齢者が愛すべき存在として孫があげられていることから、孫との関係が主観的幸福感を向上させる重要な要因の一つと考えられる[10],[11]。

一方、高齢化と共に、少子化の問題が急速に進行しつつある。現世代の加齢に伴う高齢化の進行は止めることが難しいものの、少子化の問題については子育て支援などによる出生率向上策の必要性が強く主張されている。主にこれらの主張は社会保障問題や経済的側面を懸念したものが多く、孫との関わりが高齢者の主観的幸福感を向上させる重要な要因であるならば、精神的な側面からも少子化対策の意義が説明できるであろう。すなわち、現役世代が高齢化した際の社会保障といった経済的側面だけでなく、人間の社会的、心理的な側面からも、孫と高齢者の関係を論じることには大きな意味があると考えられる。

本研究では「孫との関係や関わり方に満足している高齢者は主観的幸福感が高まる」という仮説から出発する。そして、高齢者の孫に対する感情や孫との行動に着目し、孫との関わりと高齢者の主観的幸福感の関連について明らかにし、その結果を定量的に表すことを目的とする。具体的には、高齢者に対するSD法による質問紙調査に基づき、高齢者や孫の属性、孫と共にする行動、孫への情緒的感情、主観的幸福感について調査し、得られたデータに対する基本統計量分析、探索的因子分析、共分散構造分析によって要因間の構造を明らかにする。

NAKAMURA Tatsuya

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科 2006 年度卒業生

HAMA Syotaro

武蔵工業大学大学院環境情報学研究科博士前期課程 2 年生

GOTO Masayuki

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科准教授

## 2 高齢者の主観的満足感

### 2.1 高齢化の現状と主観的幸福感を高める意義

内閣府共生社会政策統括官平成 18 年版高齢社会白書 [12]によれば、我が国の総人口は、平成 17 (2005) 年 10 月 1 日現在、1 億 2,776 万人となり、65 歳以上の高齢者人口は、過去最高の 2,560 万人となった。高齢化の要因としては、平均寿命が伸びたことと、出生率の低下による少子化があげられる。高齢者人口は平成 32 (2020) 年まで急速に増加し、その後はおおむね安定的に推移する。一方、総人口が減少することから、高齢化率は上昇を続け、平成 27 (2015) 年には 26.0%、平成 62 (2050) 年には 35.7%に達すると見込まれている。その結果もたらされる社会的な問題として、高齢労働者の増加と年金・医療・福祉その他を合わせた社会保障給付費の増加などが挙げられる。また、高齢化率がますます高まる今後は、さらに高齢者層の活性化が社会全体に大きな影響を与えるようになると考えられる。すなわち、高齢者が活気のある生活を送れるか否かは、個人が質の高い人生を送るためだけでなく、社会的なインパクトの面からも重要となっている。精神的な側面から高齢者の主観的幸福感を高め、高齢になっても社会の中で活躍できる環境を整えなければならない。

### 2.2 主観的幸福感に関わる従来研究

高齢者の適応的な老後の暮らし方が、幸福な老い (successful aging) の概念として検討されてきた。そして、このような幸福な老いの概念を規定し、自記式尺度によって測定される「肯定的-否定的な感情の連続体」を主観的幸福感 (subjective well-being) と呼ぶ。

高齢者が日々の生活を楽しみ、意義のある余生を送るためにも、主観的な生活の質の指標である主観的幸福感を高める必要がある。そのため、老年学の分野では幸福感や生活満足感などの主観的な幸福感についての研究が数多く行われている。それは、高齢者の主観的幸福感を測定し、どのような関連要因があるかを明らかにするとともに、主観的幸福感を評価し、よりよい老後を送ってもらおうという理由からである。

高齢者の主観的幸福感を測定する尺度としては Lawton によって作成された PGC モラール・スケールや古谷野 [13] による作成生活満足度尺度 K などが提案されている。これらの尺度の因子構造の安定性・再現性が繰り返し吟味され、その信頼性は高いものといえる。

また、主観的幸福感に関する研究は数多く行われている。主観的幸福感の関連要因については多くの研究で検証されており、高齢者の場合、ADL (日常生活動作) などといった身体的健康と人間関係などの豊かさ、ソーシャル・サポートといった社会関係などが規定要因であると

考えられている [14], [15].

### 2.3 ソーシャル・サポートに関する従来研究

平均寿命も伸びていく現代において、高齢者が楽しく、充実した暮らしを送ることができるか否かは、第一に本人に依存するが、高齢になればなるほど他者による支えの必要性が増してくる [16] のも事実である。そこで、注目されるのがソーシャル・サポートである。ソーシャル・サポートとはある人を取りまく重要な他者 (家族、友人、同僚、専門家など) から得られる様々な形の援助を指し、その人の健康維持・増進に重大な役割を果たすといわれている。しかし、「ソーシャル・サポートとは何か」という最も根本的問題に対して、感覚的概念としては共有されているものの、厳密な定義については研究者の間でも見解が一致していない。その測定方法にいたっては研究者の数だけあるとさえいわれている (Broadhead ら, 1983)。

従来研究において、高齢者の場合はサポートを受領するだけでなく、提供することが高齢者自身の生活にポジティブな影響を与えていることが指摘されている。また、主観的幸福感 ADL の状態により大きく影響を受けるといわれるが、主観的幸福感との直接的な関係だけでなく、抑うつや孤独感を介して主観的幸福感に影響を与えるとされている。これらの研究におけるサポート対象としては主に配偶者、家族、友人、隣人などがあげられる。

### 2.4 高齢者と孫

エリクソンらによれば、多くの高齢者はどのくらいあるかわからない自分の未来への不安に対し、孫は「無限に未来に延びる自分自身の延長」と考え、気持ちの安定を取り戻す要因であるとされている。孫のいる人たちにとっては、孫が愛情をそそぐ相手である場合が多いという報告もされている。また、祖父母と孫との交流を通して、子供たちは、祖父母からの知識や知恵の教授が行われ、一方、高齢者は老いへの自覚や、社会の役割を認識することができる。このように、高齢者と孫がふれあうことは、双方にとって有益なことが多く、その関係は今後さらに大切なものとなっていくであろう。

孫と高齢者に関する先行研究においては、孫との交流が祖父母の生きがいとなり、主観的幸福感を高めることが指摘されている [17]。また、祖父母と孫の関係は、孫の成長と共に変化し、孫の年齢によって異なるといわれている [18]。しかし、インタビューや観察による質的調査に基づく主張が多く、定量分析に基づく研究はあまり行われていない [19]。

少子高齢化が進み、高齢者と孫との関係も時代により変化していく。高齢者の子供や孫との付き合い方の意識調査結果によれば、いつも一緒に生活できるのがよいと

思っている高齢者が年々減少し、たまに会う方がよいと回答する高齢者が増加している。孫との関わり方はこれからさらに変化していくであろうと考えられる。

## 2. 5 本研究への展開

本研究では、孫と高齢者の関係という視点に着目し、他の要因と共に高齢者の主観的幸福感に与える影響について分析を行う。従来、質的調査や観察によって定性的に関係が論じられてきた孫と高齢者の関係について、質問紙調査に基づき定量的な把握を試みる。

また、従来は少子高齢化の問題として主に経済的な側面が強調されることが多かったが、もし孫との関係が高齢者の主観的幸福感に影響を与える場合には、精神的な側面からも孫との関係の希薄化は大きな問題であると言えるであろう。少子化対策は、経済的・社会的側面のみならず、高齢者の豊かな生活という意味からも重要であることが結論付けられると予想される。本研究では、以上のような仮説のもと、質問紙調査と統計分析の手法を駆使し、孫と高齢者の関係について定量的な評価を行う。

## 3 質問紙の概要と調査方法

### 3. 1 質問紙の作成

本研究では高齢者の実態を明らかにするべく、質問紙を作成し、アンケート調査による分析を行う。このような調査では、仮説に基づき有用な知見を得るために、適切な質問紙の設計が極めて重要となる。質問紙の内容には、高齢者の主観的幸福感を測定するための設問の他、ソーシャル・サポート、孫に関する項目、基本属性を問う項目も必要となる。本節では質問紙の構成内容、予備調査について示す。

#### ①生活満足度尺度K (Life Satisfaction Index K)

生活満足度尺度K (Life Satisfaction Index K) とは、主観的幸福感を測るために、古谷野・柴田・芳賀・須山(1990)の作成した尺度である。主観的幸福感を測る尺度として、LawtonのPGCモラル・スケールがよく挙げられるが、生活満足度尺度Kの方が項目数が少なく、高齢者への負担も少ない。また、因子構造もPGCモラル・スケールよりも明瞭なため、本研究では生活満足度尺度Kを利用する。

生活満足度尺度Kは「人生全体についての満足感」、「心理的安定」、「老いについての評価」の3つの因子で構成されている。回答方法はあてはまる選択肢に丸をしますので、7項目は「はい」、「いいえ」の2段階評定である。

1項目が「ほとんどない」、「いくらかある」、「たくさんある」の3段階評定。残りの1項目が「満足できる」、「だいたい満足できる」、「満足できない」の3段階評定であ

る。これらの計9項目で構成されており、各項目でポジティブな回答を行うと1点が与えられる。そして、各項目の合計得点の高い方が、主観的幸福感が高いとしている。

また、本研究では「あなたは、年をとって前よりも役に立たなくなったと思いますか」という項目は回答を行う高齢者に不快な気持ちを与えかねないということを考慮し、「あなたは、年をとって前よりも社会で活躍する場面が減ったと思いますか」という質問に変更した。

#### ②ソーシャル・サポート測定尺度

野口(1991)[20]の測定尺度では、情緒的サポート・手段的サポート・ネガティブサポートにそれぞれ4項目を、①配偶者以外の同居家族、②別居のこどもまたは親戚、③友人・知人・近隣の人など、の3つのサポート対象者グループに関して計12項目を設定している。その結果、計36項目の質問項目からなっており、個々の設問でサポートの提供者がいると回答した場合1点、いない場合は0点とし単純加算して尺度得点を算出する。

本研究では、高齢者の質問紙への回答の負担を軽くするとともに、孫との比較を目的とした分析に有用な質問紙を作成するため、測定尺度のカスタマイズを行った。

本研究では孫との比較を目的とするため、手段的サポートやネガティブサポートが孫との間に存在することは稀であると考え、情緒的サポートのみを使用することとした。また、サポート対象者は、高齢者の身近な人々を対象とするために、「家族」と「友人」の2パターンとした。

#### ③孫に関する項目

一般に、高齢者に、孫との関係を質問した場合、複数の孫を持つ高齢者は回答に迷ったり、「どの孫を想定して答えるによって回答が異なる」といった曖昧性が混入することが考えられる。そこで本研究では高齢者との関係を回答するための対象として「最も親しい孫ひとり」と限定して回答してもらうこととした。これは、質問の意味の理解にばらつきが生じないようにし、回答者の負担を軽くするためでもある。孫の性別、年齢を聞くとともに、孫の親である自分の子供の性別を尋ねた。また、「孫とご飯を一緒に食べるか」、「孫のことを叱る」などの孫に対する行動的な質問4項目、「孫と一緒にいると元気がでるか」、「孫をかわいいと思うか」などの孫に対する情緒的な質問5項目をそれぞれ「大変そう思う」、「まあまあそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」の5件法で尋ねた。

#### ④基本属性

高齢者の基本属性を把握するために、年齢、性別を尋ねた。そして、高齢者の主観的幸福感に影響を与えるで

あろう項目として、配偶者の有無、職業の有無、暮らし向き、健康状態、趣味の有無も尋ねた。

以上のように作成した質問紙に不備や間違い、また、その結果にデータの偏りが無いかを調べるために、武蔵工業大学環境情報学部と東山田地域ケアプラザの共催で実施された高齢者向けのパソコン教室に通う高齢者に予備調査を行った。回答者は、平均年齢が66.04歳(標準偏差6.03, 年齢範囲53~79歳)の計24名(男性7名, 女性17名)である。この結果を検討し、質問項目に不備やデータに偏りが無いことを確認した。

### 3.2 調査対象

調査対象は健康な高齢者とする。その理由は第一に、主観的幸福感を計るためにより多くのサンプルを必要としたためである。そのために自記式尺度を自身で回答することのできる高齢者でなければならなかったからである。第二に、健康な高齢者を対象とすることにより、偏りの少ない一般的な結果を導くことができると考えたからである。以上により、健康な高齢者を対象とすることとした。

そして、このような健康な高齢者に調査するために、千葉県松戸市の2箇所の老人福祉センター(松戸市常盤平老人福祉センター, 松戸市小金原老人福祉センター)に通う高齢者を対象とした。老人福祉センターとは60歳以上の人が、自由に利用できる高齢者の社交場である。この施設は舞台付大広間・茶室・浴室・テレビ・囲碁・将棋などもあり、茶道・華道・俳句などのクラブ活動が活発に行われている場所である。また、この施設は60歳以上の松戸市の健康な高齢者であれば、誰でも利用することができる施設である。健康な高齢者に対して質問紙調査を行うことができることから、千葉県松戸市の2箇所の老人福祉センターを本研究の調査対象とした。

### 3.3 調査方法

調査時期は下記の通りである。

松戸市常盤平老人福祉センター 10月24日, 26日,  
11月8日

松戸市小金原老人福祉センター 11月1日, 2日, 7日

調査は各老人福祉センターで行われているクラブに訪問し、質問紙の配布及び説明を行った。その後、回答を行ってもらい、回答が終わったものに関してはその場で回収をした。また、時間内に回答することができなかつたり、家で回答したいという高齢者に関しては、後日受付の方へ質問紙を提出してもらい、その後回収を行った。質問紙は2箇所の老人福祉センターで計350部配布し、

計307部回収した(回収率87.7%)。

307部のうち、ひとつの回答に対し複数の回答を行ったり、回答を行っていないかったり、明らかに回答の不備があるものを除いた結果、194件(男性64名, 女性130名)の有効回答数を得た。内訳としては、孫のいる高齢者が160名(男性49名, 女性111名), 平均年齢は72.18歳(標準偏差6.70, 年齢範囲61~94歳)と、孫のいない高齢者34名(男性15名, 女性19名), 平均年齢69.80歳(標準偏差6.70, 年齢範囲60~88歳)である。平均年齢は71.76歳(標準偏差6.76, 年齢範囲60~94歳)であった。

## 4 基本統計量に基づく分析

### 4.1 基本統計量

データ全体の特徴を把握するためにまず、基本統計量による考察を行った。表1は、孫の有無で層別し、孫のいる160名に対する基本統計量を示したものである。孫の性別や子供の性別の男女比はほぼ半々となった。

1~5の5段階評価で平均4.0以上の項目は、回答した高齢者が全般的に「そう思う」と肯定的な回答をした項目といえる。「孫と一緒にいて楽しい」、「孫がかわいい」、「一緒にいると元気になる」という項目は総じて高い平均点を示しており、孫に対する情緒的な感情意識は回答者全員に共通して高いことが伺える。この結果からも、高齢者が孫に対する特別な感情を抱いていることがわかる。

### 4.2 平均値の差に関する分析

主観的幸福感を計る尺度である生活満足度尺度Kの得点が、高齢者や孫の属性の違いによって有意差があるかを検証する。全体を「孫のある・なし」、「趣味のある・なし」、「仕事のある・なし」、「配偶者のある・なし」、及び「前期高齢者と後期高齢者」で層別し、生活満足度尺度Kの平均得点の差をまとめた結果を表2に示す。ただし、60歳以上75歳未満の高齢者を前期高齢者、75歳以上の高齢者を後期高齢者としている。

この結果、有意水準5%で「孫のある・なし」と「趣味のある・なし」で層別した場合に、生活満足度尺度Kの平均値に有意な差が見られるという結果となった。

さらに孫のいる高齢者(160名)について、「同居のある・なし」、「孫の性別」、「子の性別」などで層別を行った結果、平均値の差に有意性はみられなかった。

### 4.3 考察

表2より、孫のいる高齢者の方が孫のいない高齢者よりも主観的幸福感が高いという結果を得ることができた。この結果から、孫の存在が高齢者の主観的幸福感になん

らかの影響を与えていることが伺える。

趣味のある高齢者は主観的幸福感が高いという結果になったが、本研究では老人福祉センターのクラブ活動を行っている高齢者を対象としたため、趣味とクラブ活動は同等として扱われ、クラブ活動を楽しめていない人が

趣味はないと回答したのではないかと考えられる。また、従来研究では仕事の有無や配偶者の有無が主観的幸福感に影響を与えるといわれることがあるが、本研究ではそれを見出すことはできなかった。

また、従来研究では高齢者自身と孫の性別の違いによ

表1 孫のいる高齢者の基本統計量による分析

変数名	データ数	合計	最小値	最大値	平均値	標準偏差
孫の年齢	160	2081	1	36	13.0062	7.28874
孫の性別	160	67	0	1	0.4187	0.4949
子の性別	160	83	0	1	0.5187	0.50122
同居有無	160	23	0	1	0.1438	0.35194
孫とご飯を一緒に食べる	160	599	1	5	3.7438	1.05953
孫と一緒に遊ぶ	160	512	1	5	3.2	1.32608
孫にプレゼントをあげる	160	614	1	5	3.8375	1.00243
孫を叱る	160	443	1	5	2.7688	1.28964
孫との関係に満足	160	638	2	5	3.9875	0.80866
一緒にいて楽しい	160	703	1	5	4.3937	0.76968
孫がかわいい	160	742	1	5	4.6375	0.63926
孫に会えないとさびしい	160	627	1	5	3.9187	1.02774
一緒にいると元気がでる	160	665	1	5	4.1562	0.93531
高齢者年齢	160	11548	61	94	72.175	6.7045
性別	160	111	0	1	0.6937	0.46238
配偶者有無	160	111	0	1	0.6938	0.46238
孫の数	160	473	1	9	2.9562	1.63048
仕事有無	160	26	0	1	0.1625	0.37007
健康状態	160	619	1	5	3.8687	0.8402
暮らし向き	160	534	1	5	3.3375	0.86065
趣味有無	160	152	0	1	0.95	0.21863
生活満足度尺度K	160	847	1	9	5.2938	2.17937

表2 高齢者の属性による生活満足度尺度K得点の層別結果

項目		人数	生活満足度 尺度Kの平 均得点	標準偏差	平均値の 差	検定
孫	孫あり	160	5.294	2.179	1.000	*
	孫なし	34	4.294	2.023		
趣味	趣味あり	183	5.213	2.170	1.668	*
	趣味なし	11	3.545	1.809		
仕事	あり	31	5.516	1.998	0.473	
	なし	163	5.043	2.212		
配偶者	あり	134	5.104	2.104	-0.046	
	なし	60	5.150	2.364		
年齢区分け	後期高齢者	55	5.200	2.172	0.114	
	前期高齢者	139	5.086	2.192		

\*:  $p < 0.05$

り、親密度に差異があるといわれているが、孫の性別と主観的幸福感の関連は見出すことができなかった。また、同居の有無でも有意差がなかった。質問紙調査を行っている際に「孫や子供たちとの生活が億劫である」と言う高齢者も存在した。このことから、高齢者と孫は必ずしも一緒にいれば良いわけではないことがわかった。高齢者と孫の付き合い方が年々変化してきていることもこの理由に挙げられる。

本研究は松戸市の常盤平老人福祉センターと小金原老人福祉センターでの質問紙調査を行ったため、この調査場所による差異についても検討を行った。その結果、この二つの老人福祉センターでの主観的幸福感には有意差がないということから、本研究では同じ松戸市の施設での調査とし、層別せずに全データに対して分析を進めることとする。

### 5 探索的因子分析による特徴抽出

質問紙によって観測された変数がどのような潜在因子から影響を受けているかを探ることと、分析結果を基に共分散構造分析を行うための準備として、探索的因子分析を行う。

因子分析を行った結果、得られた固有ベクトルを表3に示す。

表3の結果より各因子の解釈を行った結果、次のような因子の名前をつけることができた。

因子1：「孫と一緒にいると元気がでる」、「孫と一緒にいて楽しい」、「孫に会えないとさびしい」、「孫との関係に満足」、「孫がかわいい」という孫への情緒的な質問の項目の値が大きいことから、因子1は『孫に対する情緒

的感情』因子と解釈する。

因子2：「暮らし向き」、「健康状態」の2項目で構成されている。この二つは個人の生活状態に大きく影響がある。そこで、因子2は『生活状態』因子と解釈する。

因子3：「孫を叱る」、「ご飯を孫と一緒に食べる」、「孫と一緒に遊ぶ」、「孫にプレゼントをあげる」という孫との行動に関する項目の値が大きい。そこで、因子3は『孫との行動』因子と解釈する。

因子4：「友人サポート得点合計」、「家族サポート得点合計」の2項目で構成されている。この二つは情緒的なソーシャル・サポートの質問項目から構成されているので、因子4は『ソーシャル・サポート』因子と解釈する。

因子5：「孫の年齢」、「高齢者年齢」の2項目で構成されている。どちらも年齢に関する項目となっている。そこで、因子5は『年齢』因子と解釈する。

なお、固有値が1以上の因子は因子5までとなっていることから、本研究では因子5までの結果を用いて以後の共分散構造分析を進める。

### 6 共分散分析構造分析による主観的幸福感のモデル化

前節の因子分析により得られた潜在因子より、共分散構造分析による関式化を行い、孫との関係と高齢者の主観的幸福感の関係を明らかにする。因子分析結果から抽出された潜在因子を基に主観的幸福感の構造に関する仮説モデルを作成し、共分散構造分析を行う。そして、得られたモデルを修正・改良し、適合度の高いモデルを構築する。

表3 因子分析結果の固有ベクトル

変数名	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
	孫に対する情緒的感情	生活状態	孫との行動	ソーシャル・サポート	年齢	
孫と一緒にいると元気がでる	<b>-0.858</b>	0.138	0.164	-0.055	-0.022	-0.242
孫と一緒にいて楽しい	<b>-0.741</b>	-0.032	0.131	-0.137	-0.198	0.239
孫に会えないとさびしい	<b>-0.667</b>	0.101	0.2	0.017	-0.106	-0.005
孫との関係に満足	<b>-0.561</b>	-0.169	0.157	-0.061	0.016	0.481
孫がかわいい	<b>-0.554</b>	-0.05	0.104	-0.045	-0.078	0.139
暮らし向き	0.131	<b>-0.64</b>	0.172	0.001	0.309	-0.032
健康状態	-0.042	<b>-0.526</b>	-0.039	-0.095	-0.136	0.045
孫を叱る	-0.092	-0.106	<b>0.626</b>	-0.118	-0.265	-0.052
ご飯を孫と一緒に食べる	-0.367	0.166	<b>0.566</b>	-0.09	-0.069	0.383
孫と一緒に遊ぶ	-0.407	0.052	<b>0.553</b>	-0.06	-0.363	0.104
孫にプレゼントをあげる	-0.234	-0.064	<b>0.339</b>	-0.052	-0.006	0.027
友人サポート得点合計	-0.171	-0.116	0.077	<b>-0.971</b>	-0.098	-0.046
家族サポート得点合計	0.023	-0.045	0.274	<b>-0.387</b>	0.213	0.163
孫の年齢	0.091	-0.084	-0.126	-0.058	<b>0.809</b>	-0.109
高齢者年齢	0.134	0.074	-0.197	0.036	<b>0.805</b>	0.106

### 6. 1 共分散構造モデルによる分析結果

図1は仮説モデルに改良を加えながら探索的に得られた共分散構造モデルである。パス係数の有意水準の低いものから削除していき、適合度の高いモデルを作成した結果このような構造図が得られた。モデルの適合度を示す指標も高く、適合度の高いモデルといえる。パス係数の有意水準は生活状態と孫との行動、生活状態と孫に対する情緒的感情と孫との行動、孫に対する情緒的感情から主観的幸福感へのパスを除けば、すべて1%水準で有意である。

生活状態では「暮らし向き」、孫に対する情緒的感情では「孫と一緒にいて楽しい」、孫との行動因子では「孫と一緒に遊ぶ」という項目に、それぞれ強い影響を与えている。また、主観的幸福感に影響を与える要因では「生活状態」が高い値を示し、強い影響を与えていることが読み取れる。ついで「孫に対する情緒的感情」も主観的幸福感に影響を与えていることがわかり、生活状態の改善と共に孫への感情の度合いが高まる事で主観的幸福感も高まるという構造がみられる。

注目すべきは孫に対する情緒的感情から主観的幸福感

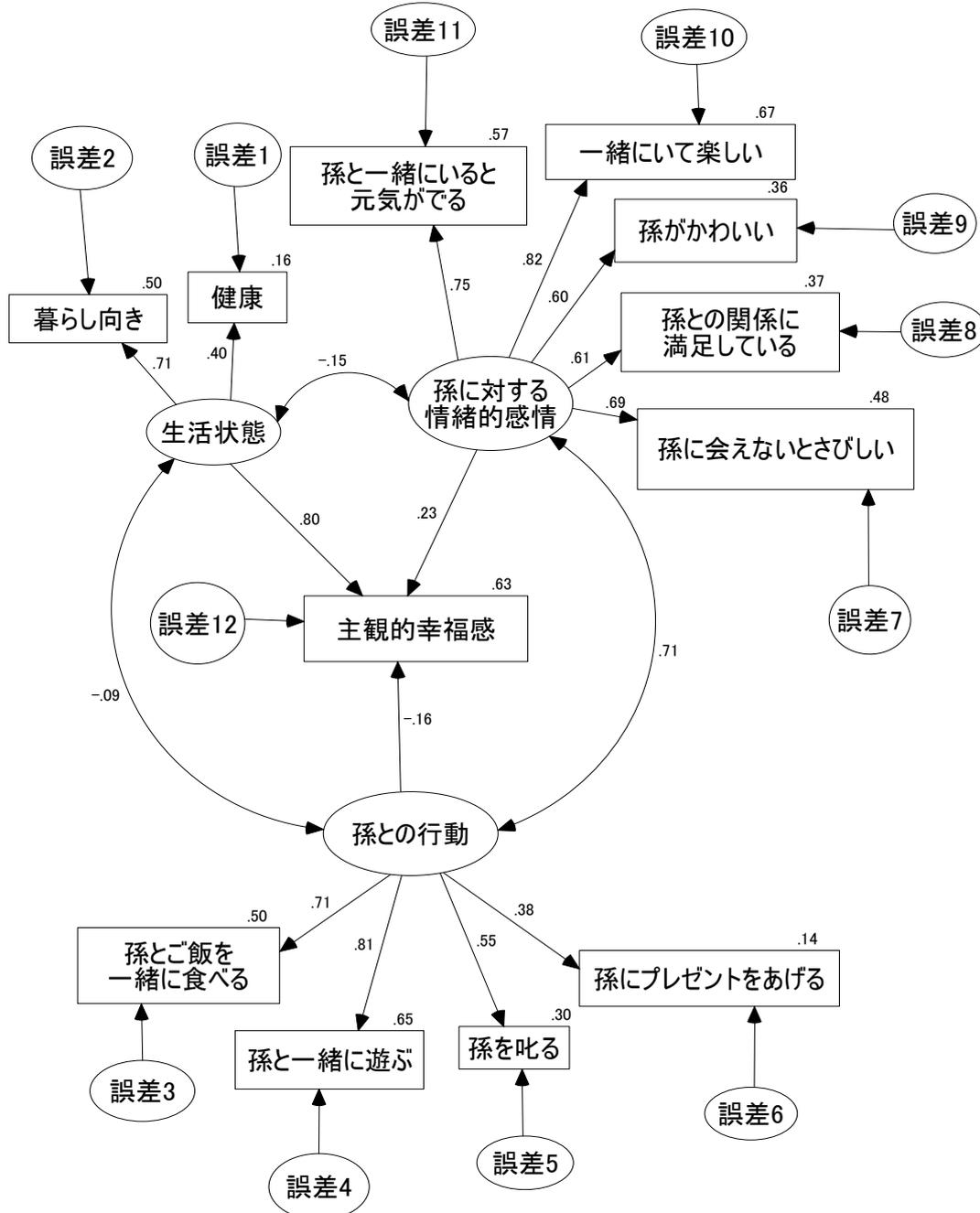


図1 主観的幸福感の共分散構造モデル

へのパスは正の値を示しているが、孫との行動からのパスは負の値を示していることである。孫に対する情緒的感情が主観的幸福感に正の影響を与えるのは、「孫はかわいい」、「孫はいきがい」といわれるように、孫への想いは高齢者の主観的幸福感を直接高める効果があるためと考えられる。一方、孫との行動因子は主観的幸福感に負の影響を与えるが、これは「孫への想い」を伴わない「孫との行動」は高齢者にとって有意義ではないということの意味する。ここで、パス係数はその他の変数を全て一定値に固定し、パス両端の変数のみを変化させた場合の

関係性を表した数値であることに注意する。「孫との行動」は、孫を想う気持ちが高まることを通じて主観的幸福感に間接的にプラス効果を生むのであり、気持ちに伴わない場合には煩わしさや疲労を与え、逆に主観的幸福感を下げる要因になると解釈することができる。孫への想いが高まり、その結果として孫との行動機会が増えるという好ましい関係が重要であることが伺える。

### 6.2 前期高齢者と後期高齢者による層別

高齢者の年齢の違いなどによる構造モデルの差異を検

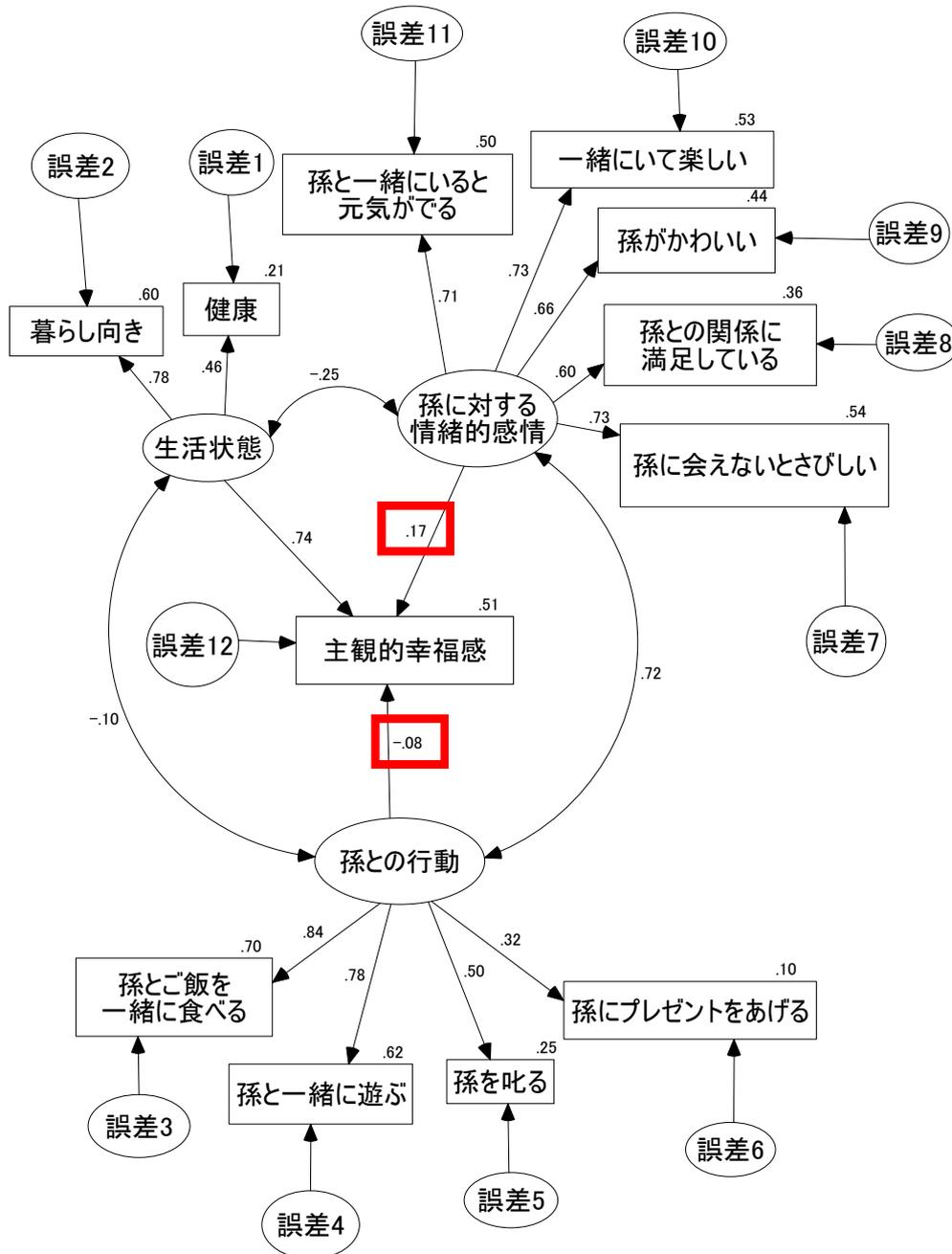


図2 前期高齢者（60歳以上75歳未満）の共分散構造モデル

討するため、高齢者を60歳以上75歳未満の前期高齢者、75歳以上の後期高齢者で層別し、それぞれのグループ別に共分散構造分析を行い、得られた構造モデルを比較検討する。その結果を図2と図3に示す。

前期高齢者よりも後期高齢者の方が、孫に対する情緒的感情から主観的幸福感へのパス係数が大きく、孫との行動因子から主観的幸福感へのパス係数は負の方向に大きい点について注目することができる。すなわち、孫に対する関わり方と主観的幸福感の関係性は、年齢の高い高齢者の方が強まるといえる。

その理由として、高齢者と孫の年齢間に高い正の相関があり、後期高齢者の方が孫の年齢も高くなることが挙げられる。一般に孫が成長していくにつれて、孫の学業や仕事上の制約が生じ、高齢者と孫の関わる時間は減少するケースが生じる。また、高齢者の老化と孫の成長により、思考スピード、動作スピードの差が増大し、両者のコミュニケーションに対する感覚のずれが生じ、高齢者と孫との思考能力のミスマッチも生じ易くなる。孫に対する情緒的感情が伴えば良いが、これを伴わない場合の孫との行動は、年齢が若い時よりも強い違和感や不快

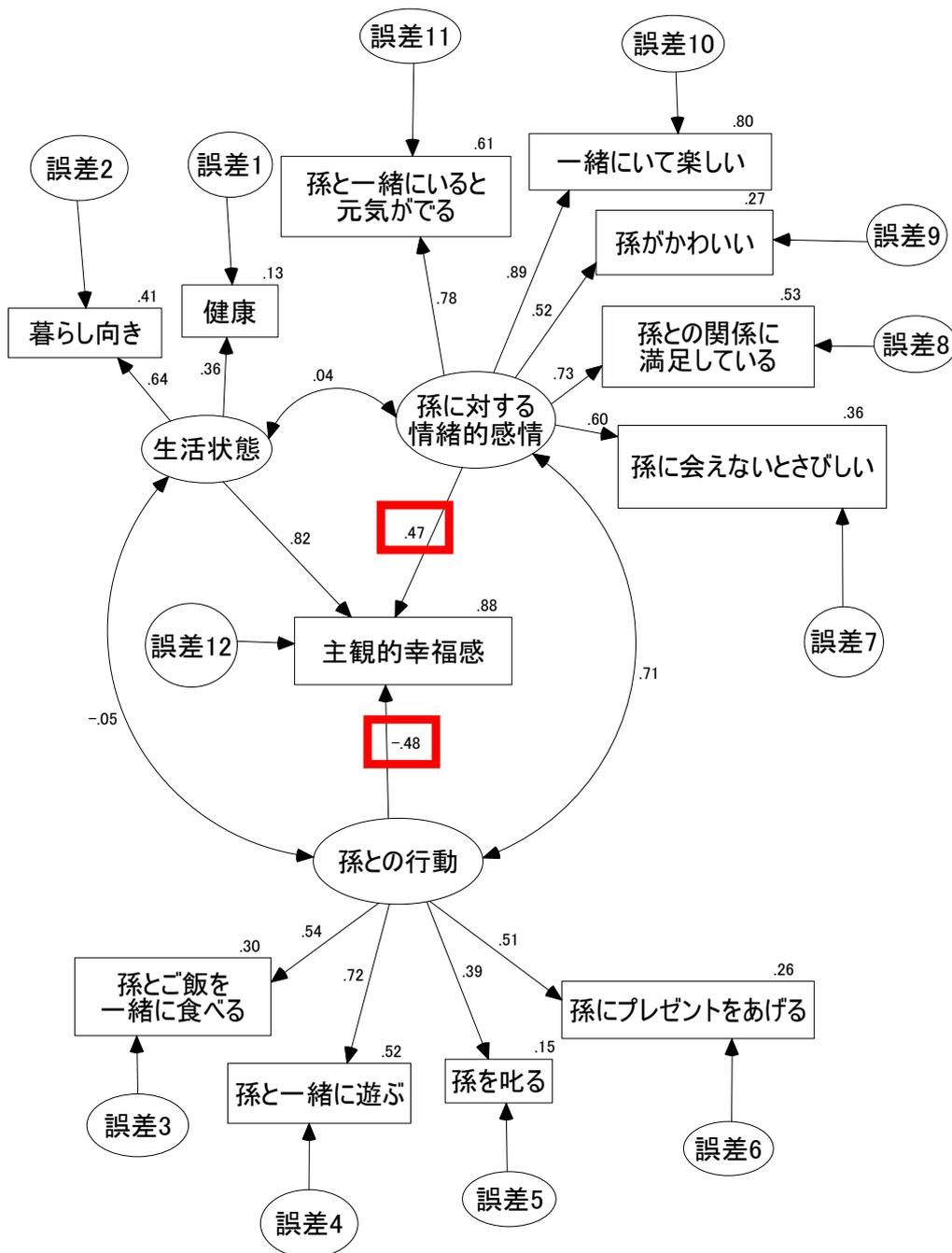


図3 後期高齢者（75歳以上）の共分散構造モデル

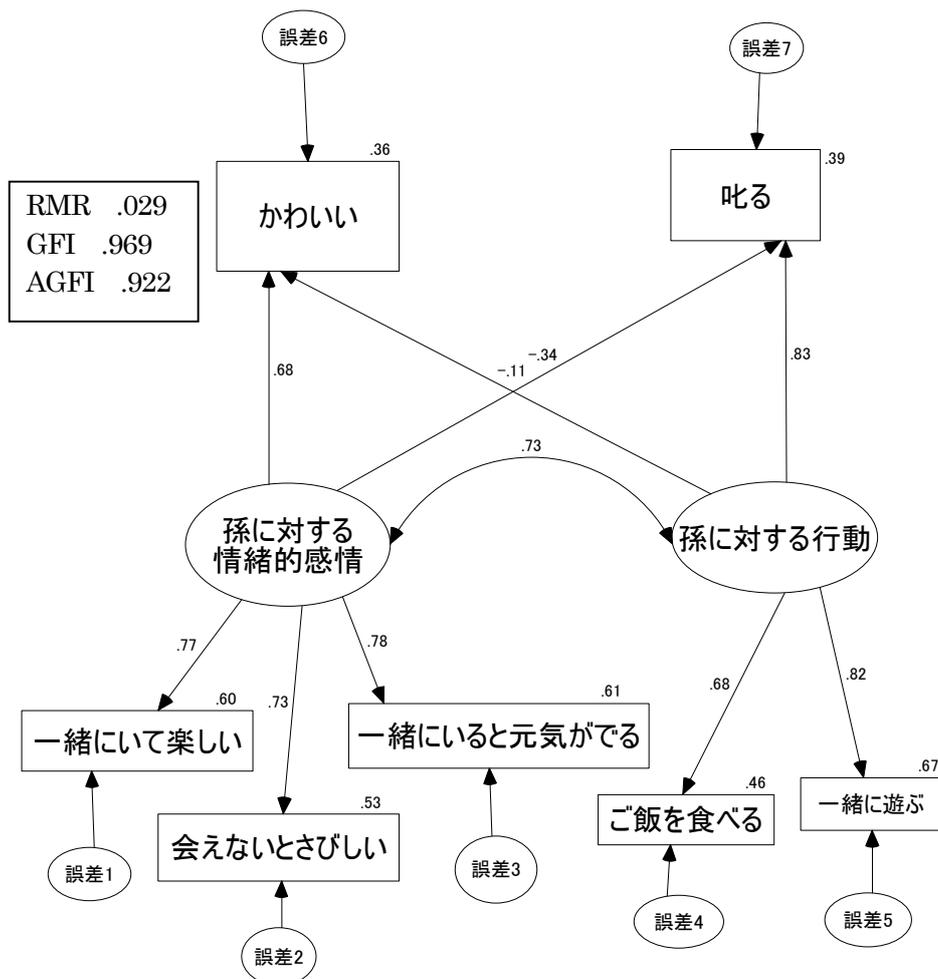


図4 孫に対する情緒的感情と孫との行動の関連

感となって作用すると考えられる。逆に、後期高齢者になっても孫に対する情緒的感情が強い場合には、高い主観的幸福感を感じることになり、ミスマッチの生じるグループとの差が広がる。そのために両変数間の関係性は強まる結果となり、年齢が上がるほど孫との関係の重要性は高まると言える。

図4は孫に対する情緒的感情と孫との行動の関連について表した図である。孫に対する情緒的感情が高まると孫をかわいいと思う値が向上するが、孫を叱りにくくなる。一方、孫との行動が増えると孫を叱る頻度が増すが、孫をかわいいと思う値は低くなる傾向がある。このことから、孫に対する情緒的感情と孫との行動は互いに関係性があり、全体視点でその構造をとらえなければならないといえる。

## 7 考察

### 7.1 孫と主観的幸福感の関係について

高齢者はそれぞれ個性があり、子供の嫌いな高齢者や、自分の余生を精一杯楽しみたいと思う高齢者など、長い

人生を生きてきた高齢者の価値観は多種多様であるといえる。しかし、大局的に孫との関係が高齢者の主観的幸福感を向上させることが示唆されたことは意義があったと考える。

高齢者の主観的幸福感を高めることを考える上で、高齢者にすべてを委ねるのではなく、高齢者に若年層が歩み寄り、社会全体で支えていく考え方が重要であろう。とくに、孫との関係は、一般的にはその間に親（すなわち、高齢者から見た子ども）が介在する。自分自身の親の主観的幸福感が、自身の子供たちによって高められることを認識し、時間を共有する機会を積極的に提供するという行動が重要であろう。

また、本研究では孫と高齢者という親族関係を対象としたが、この関係は例えば「近くの小学校の子供たち」でも同様であるのか否かを検討する余地がある。孫との関係は家族内の問題であり、また加齢と共に孫も成長してしまうが、高齢者と地域の学校との関係は継続性がある。高齢者が小学生相手に様々なことを教えたり、地域での活動を共有する機会を提供することは、社会全体で考えていくべき取り組みである。このような地域の子供

たちとの関係が、高齢者の主観的幸福感にどのように関係するかを調べることは今後の課題である。

## 7. 2 対象とした高齢者集団について

本研究では松戸市の老人福祉センターのクラブ活動を行っている高齢者を対象とした。このクラブ活動に通う高齢者への質問紙調査を行っている際に、「ここへ来ているだけで私たちは幸せ」という意見をよく聞いた。このような意見から施設の存在自体が重要であることがわかる。そして、このような生活ができる理由として、ここに通う高齢者をサポートしている人々を挙げることができる。すなわち、クラブ活動に行くことを支えてくれる家族、クラブ活動を共にする仲間の存在、クラブ活動の場を提供している松戸市の事業の充実といった背景のもとに、このような意見が出てくるものと考えられる。この結果、本研究で対象とした高齢者では、周囲の人々の援助を点数化したソーシャル・サポート得点が高まったのではないかと考えられる。

さらに、このようなソーシャル・サポートが高く、孫との同居している割合の少ない高齢者に対して、孫という存在が高齢者の主観的幸福感を向上させることが示されたことは大変意義がある。すなわち、周囲の人々の援助が豊かで、孫が身の回りにいない高齢者でさえ、孫の存在が主観的幸福感を向上させる要因としてあげられたということは、孫という存在は高齢者にとって特別な存在であり、極めて重要であることが示されたと考えられる。今後はソーシャル・サポートの十分でない高齢者にとって、孫という存在が高齢者の主観的幸福感を高めることができるかを調査することが重要であると考えられる。

## 7. 3 少子化の影響と改善

分析の結果、「孫のある・なし」や「孫への情緒的感情」、「孫との行動」が高齢者の主観的幸福感を高めることが明らかとなった。一方、少子高齢化していく日本において、高齢者が増加し、子供が減少するということは、孫を持つ高齢者が減少していくということを意味する。すなわち、少子化は高齢者と孫との関係の機会を奪い、主観的幸福感の低下につながると考えられる。孫の減少はこれからの高齢社会に大きな影響が考えられ、その意味からも少子高齢化を解決していかなければならない。

現在、未婚であったり、子供のいない若い人たちにとって、将来、年を取っていく上で子供や孫がいないことは、子供や孫への期待をすることができず、未来への期待もすることができない。エリクソンらによれば、多くの高齢者はどのくらいあるかわからない自分の未来への不安に対し、子供や孫は「無限に未来に延びる自分自身の延長」と考え、気持ちの安定を取り戻しているという報告がされている。また、孫が愛情をそそぐ相手となっ

ていることが多いという報告もされている。子供を育てる余裕がなかったとしても、長い目でみれば、子供の存在というものはとても大きなものであるといえ、命をつなぐということは大変重要なことである。

## 8 結論と今後の課題

本研究では、高齢者の孫に対する感情や孫との行動に着目し、孫との関わりと高齢者の主観的幸福感の関連について明らかにし、その結果を定量的に表すことができた。

研究の結果、高齢者の生活状態である暮らし向きや健康状態が高齢者の主観的幸福感に影響を与え、孫の存在により高齢者の主観的幸福感も高まることが示唆された。そして、孫との関連については、孫に対する情緒的感情が高齢者の主観的幸福感を高める要因として挙げられる。しかし、孫への情緒的な感情と孫への行動が伴わない場合は、孫との行動が高齢者の主観的幸福感を低下させることもある。孫との行動は、孫を想う気持ちが高まることを通じて主観的幸福感に間接的にプラス効果を生むのであり、気持ちが伴わない場合には煩わしさや疲労を与え、逆に主観的幸福感を下げる要因にもなりえるからであると考えられる。

本研究では健康な高齢者を対象とした調査であったために、ほとんどの高齢者のソーシャル・サポート得点は高得点であった。このような人たちにおいても孫という存在が高齢者の主観的幸福感の向上につながったことはとても意義のある結果といえる。一人暮らしの高齢者やADL（日常生活動作）の弱い高齢者を対象とした調査の場合、高齢者の主観的幸福感にはどのような影響を与えるのかを分析することは今後の課題である。

## 謝辞

本研究は、松戸市役所の方々、松戸市常盤平老人福祉センター、松戸市小金原老人福祉センターの方々のご協力により、高齢者への質問紙調査の場を提供して頂きました。また、質問紙の予備調査として、武蔵工業大学と東山田地域ケアプラザの共催で開催された高齢者向けパソコン教室への参加者にもご協力頂きました。本研究を遂行するにあたり、多大なご協力とご支援を賜りました関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

## 参考文献

- [1] 前田大作：“高齢者の”生活の質” —社会・行動科学的側面についての縦断的研究—”，社会老年学，Vol. 28, pp. 3-18, 1988

- [2] 古谷野亘：“主観的幸福感の測定と要因分析”，社会老年学, Vol. 20, pp. 60-64, 1984
- [3] 古谷野亘：“社会老年学におけるQOL研究の現状と課題”，保健医療科学, Vol. 53, pp. 204-208, 2004
- [4] 久田満：“ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題”，看護研究, Vol. 20, pp. 170-191, 1987
- [5] 鈴木征男：“MONTHLY REPORT 中高齢者におけるソーシャル・サポートの役割－孤独感との関連について－”，ライフデザインレポート, Vol. 168, pp. 4-15, 2005
- [6] 金恵京, 杉澤秀博, 岡林秀樹, 深谷太, 郎柴田博：“高齢者のソーシャル・サポートと生活満足度に関する縦断研究”，日本公衆衛生雑誌, Vol. 46, pp. 532-541, 1999
- [7] 福岡欣治, 橋本幸：“高齢者の過去および現在のソーシャル・サポートと主観的幸福感の関係”，静岡文化芸術大学研究紀要, Vol. 5, pp. 55-60, 2005
- [8] 野口裕二：“高齢者のソーシャルネットワークとソーシャル・サポート：友人・隣人・親戚関係の世帯類型別分析”，老年社会科学, Vol. 13, pp. 89-105, 1991
- [9] 中島千織：“高齢者のソーシャル・サポートに関する探索的研究－個別面接データから－”，名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, Vol. 47, pp. 167-172, 2000
- [10] 西川晶子, 松岡広子, 伊藤孝治, 長谷川かず江：“子・孫世代と同居している高齢者のモラルと関連要因”，日本看護研究学会雑誌, Vol. 20, p. 156, 1997
- [11] 伯祐子, 伊丹君和, 浅野美礼：“「祖父母－孫関係」にみる高齢者のQOLに関する研究”，日本看護学会誌, Vol. 16, pp. 364-365, 1996,
- [12] 平成18年版高齢社会白書,  
<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2006/gaiyou/18indexg.html>
- [13] 古谷野亘：“生活満足度尺度の構造－因子構造の不変性”，老年社会科学, Vol. 12, pp. 102-116, 1990
- [14] 原田一郎：“高齢者の時間的態度と主観的幸福感の関連について”，名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, Vol. 48, pp. 153-161, 2001
- [15] 安永明智, 谷口幸一, 徳永幹雄：“高齢者の主観的幸福感に及ぼす運動習慣の影響”，体育学研究, Vol. 47, pp. 173-183, 2002
- [16] 高橋恵子, 波多野諠余夫：生涯発達心理学, 岩波書店, 1990
- [17] 山崎美佐子, 角間陽子, 草野篤子：“異世代間におけるネットワークの可能性－祖父母と孫の交流関係から－”，信州大学教育学部紀要, Vol. 112, pp. 99-110, 2004
- [18] 杉井潤子：“祖父母と孫との世代間関係－孫の年齢による関係性の変化－”，奈良教育大学紀要, Vol. 55, pp. 177-189, 2006
- [19] 前原武子, 金城育子, 稲谷ふみ枝：“続柄の違う祖父母と孫の関係”，教育心理学研究, Vol. 48, pp. 120-127, 2000
- [20] 野口裕二：“高齢者のソーシャル・サポート：その概念と測定”，老年社会学, Vol. 34, pp. 37-48, 1991
- [21] 涌井良幸, 涌井貞美：図解でわかる多変量解析, 日本実業出版社, 2001
- [22] 涌井良幸, 涌井貞美：図解でわかる共分散構造分析, 日本実業出版社, 2003
- [23] 豊田秀樹：共分散構造分析[入門編], 朝倉書店, 1998
- [24] 豊田秀樹：共分散構造分析[疑問編], 朝倉書店, 2003
- [25] 小塩真司：Spss と Amos による心理・調査データ解析因子分析・共分散構造分析まで, 東京図書, 2004
- [26] 多賀太：“男性のエンパワーメント？社会経済的変化と男性の「危機」”，国立女性教育会館研究紀要, Vol. 9, pp. 39-50, 2005